

亀田メディカルセンター 様

業務情報を共有するためにイントラネットを構築。 オープンソースのグループウェアの活用により、 医師や看護師の利用率向上を実現

亀田メディカルセンター（医療法人鉄蕪会）

所在地：千葉県鴨川市東町929番地
開設：1954年8月27日
代表者：理事長 亀田 俊忠
事業内容：千葉県鴨川市に本拠を置く亀田総合病院のほか、亀田クリニック、亀田リハビリテーション病院などを経営する医療法人。医師と患者の関係を「オープンパートナー」と位置付けるマスタープランのもとで、約370床の全面個室型急性期病棟を2005年4月オープンに向け建設中だ。
URL：http://www.kameda.or.jp

千葉県鴨川市に本拠を置く亀田メディカルセンターは、ITの先進的な活用を行っていることで広く知られている。十年前には、病院全体で医療情報を共有する環境として、電子カルテシステムを構築した。さらに2003年、今度は病院内での業務情報を共有するために、イントラネットを構築した。intra-mart フレームワークとスタートパックを利用して構築した情報環境は、「i マートシステム」と呼ばれ、以前のグループウェアに比べて使いやすくなるための工夫をさまざまに作り込み、いそがしい医師や看護師の利用率向上に貢献している。今後は、フレームワークに標準装備されているワークフローモジュールを利用して、100種類以上ある各種申請業務のワークフローを構築していく。

医療情報は高度に共有。業務情報も共有したい

千葉県鴨川市に本拠を置く亀田メディカルセンターは、患者中心のパーソナルな医療サービスを提供する病院として名高い。2005年4月稼働の新病棟では面会時間、消灯時間などの規制はほとんどない。入院患者は、全病室に設置されたパソコンまたは自分の携帯電話を使って、自分の電子カルテや治療計画などをいつでも読むことができる。受ける医療から「参画する医療」への脱皮が図られているのだ。

十年前には電子カルテシステムも導入した。「病院全体でカルテ情報を共有できる大規模システムとしては、世界初だったと認識しています」と、医療法人鉄蕪会 医療管理本部 QMS 事務局係長 三上昌代氏は胸を張る。

この電子カルテは使いやすさを追求した手作りのシステムで、医師や看護師が意見を交換するメール機能も備わっている。一方で、業務面の連絡手段は紙に頼っていた。

「以前グループウェア製品を導入しましたが、独自の電子カルテシステムに慣れてしまった医師や看護師は、病院の業務内容に合っていないシステムをまったく使おうとしなかったのです」と、情報システム管理本部の長田壽郎氏は言う。

オープンソースは intra-mart の最大の魅力

ソフトウェアの管理、とりわけバージョンアップのたびにインストールにも手間がかかっていたため、2001年末ごろ、Webベースで新し

い情報共有環境を構築することになった。フリーソフトを含めてNotesなどの7種類のソフトウェアを1年半にわたって試用し、慎重に比較した。

ところが、ほとんど他社製品に決まりかけていたときに intra-mart を知り、一気に惚れ込んでしまった。決定的だったのは、オープンソースであることだ。将来的には亀田メディカルセンターならではの業務に合わせたカスタマイズも可能であるし、他システムとの連携も実現することができる。オプションソフトを別途購入しなくても、ワークフローモジュールやポータル機能を始め、各種モジュールがそろっていることにより、短期開発ができることも評価した。しかも低価格であった。「ライセンス料だけなら以前のグループウェアの5分の1、サーバを含めても3分の1のコストで情報共有環境を実現できました」と情報システム管理本部の荒井章夫氏は言う。

業務情報が共有できてこそ「患者のためのIT活用」も推進できる

2003年8月、intra-mart のスタートパックを用いたイントラネットが完成した。病院であるだ

けに、24時間365日ノンストップで稼働しており、現在約2000ユーザーが利用している。

これまでほとんど使われていなかったグループウェアを、約2000名が使うようになったのは、システム管理室のスタッフが教育に力を入れたり、コンテンツに工夫を凝らしたりしたからだ。新着情報をトップページに表示するなど、思いついたカスタマイズの工夫を簡単に形にできる intra-mart ならではの柔軟性も役に立った。

利用している機能は、電子メール、掲示板、スケジュール共有などの基本的なグループウェア機能に加えて、ワークフローである。

「100以上ある各種申請業務をイントラネットに載せて、医師や看護師の効率的な時間の使いかたを支援したい」と、情報システム管理本部 畔田智浩氏は意気込む。

「当病院は治療のためのIT活用に積極的に取り組んでいますが、そのベースには、業務のための情報共有環境が不可欠です」と三上氏は指摘する。イントラネット構築によってこの土台がしっかりと構築された今、亀田メディカルセンターは「患者のためのIT」をより積極的に推進していく体制を完成させたのである。

